

静岡県立大学短期大学部

研究紀要 34-W 号 (2020 年) -1

子どもが感じる街なかの興味関心

— 幼児の街風景の捉え方・保育者の支援のあり方 —

Interest in the city that children feel

-How to capture the scenery of the town for young children, and how to support childcare workers-

副島 里美・鈴木和歌子・服部充代

SOEJIMA Satomi ・SUZUKI Wakako ・HATTORI Mitsuyo

【目的】

保育所やこども園などで行う「お散歩」は、多様な価値が認められている。例えば、幼児の身体面の発達助長（筋肉や内臓機能の発達）、精神面の発達助長（持久心など）、メンタルヘルスの要因（広々とした空間の中で気持ちを解きほぐしリフレッシュする）、仲間関係的要素（友だちと楽しく会話する、手をつなぎお互いの存在を認め合う、お互いを気遣いあいながら歩く）、などである。また、もう一つの大きな要因は、「地域との関係性」があげられる。自分達が暮らす街にはどのような空間（場所）があり、どのような人が住んでいるのか。近年は地域コミュニティも希薄となり、大人であっても自分が住む地域について理解できていないことも多い。しかし、日本では古より、子どもは地域ぐるみで育成されてきた¹⁾。子どもは多くの人に愛され、見守られていた。そして、多様な考えや価値観などにふれながら成長してきたのである。

しかし、一昨年度の「大津事件」、また近年多く発生している「不審者」さらには本年度流行している「新型コロナウイルス」の影響により、子どもと地域との関わりは弱体化している。また「大津事件」直後には、行政から園で作成している「お散歩マップ」の見直しが要請された。結果、「お散歩に行かない」園も頻発している。今こそ、園で行う「お散歩」について見直すことが重要課題となっている。

現在の「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」などでは、「遊びを中心とした保育」、「子どもを主体とした保育」が求められている。また、「地域との連携」も掲げられている。そこで、お散歩の中に「子どもが興味関心を持つ

事柄」を見出し、地域を見直すきっかけとすること、それを遊びの中に展開できるかどうか、の検証が必要であると思われた。

本研究の目的は、①子どもがお散歩の際にどのような事柄に着目し、興味関心を持つのかを把握することで、お散歩の意義を再確認すること、そして②保育者が求める「お散歩の意義」を再考することにより、お散歩とその後の支援について検討することである。

【研究方法】

1. 対象園：東海地方Aこども園

対象園は、東海地方の住宅街にある定員150名の園である。なお、今回の対象幼児は5歳児クラス（年長児：32名）である（2回とも参加22名、1回目のみ参加3名、2回目のみ参加6名、2回とも欠席1名）。

2. 実施方法

実施内容に関しては三輪²⁾を参考にした。

- 1) 園の保育者（5名）が、実施前にお散歩のコースを下見し、安全を確認する。また、この際に自分が“子どもに見てほしいモノや箇所”の写真を撮影した。また、模造紙でお散歩のコース図を作成する。
- 2) 実施前日、園の保育者から対象児に、「明日、園の周りにお散歩に行くこと」を伝えた。その際に、“「不思議だな」と思ったもの、「綺麗だな」と思ったもの、「すごいな」と思ったものなどを、一人5枚写真に撮ってほしいと思っています”と説明した。
- 3) 実施当日の朝、再度お散歩の注意点の説明を行い、グループ毎に時間差で出発した。グループは、1グループ5名前後で編成し、それぞれに保育者が引率した。また、お散歩のコースは園の通常のお散歩コースとし、対象児の馴染み深いコースにするなど、安全には十分な配慮を行った。
- 4) それぞれ「興味・関心を持ったもの」をチェキで5枚まで写真撮影する。チェキは保育者が持ち、対象児が写真撮影を希望した時にチェキを渡した。対象児が撮った写真は、自分の撮った枚数を理解するために、透明な袋に入れて対象児自身が管理した。
- 5) 帰園後、対象児が撮った写真を個人毎に写真を撮った。この後、事前に作成したお散歩のルート図に保育者が写真を貼り、なぜこの写真を撮ったのかを全員の前で発表した。
- 6) 写真はしばらく保育室に子どもたちの見える状態で貼っておき、お散歩マップの変化など子どもたちの様子を観察した。
- 7) ある程度マップが出来上がり、これ以上の書き込みがないと判断した時点で廊下に張り替えた。

3. 実施日

2019年11月及び12月に1度ずつ、合計2回行った。1回の実施時間（説明から発表まで）は2時間程度である（※ 今回の実践は新型コロナ

ウイルス流行以前に行っている)。

【結果】

1. 当日の詳細

5名前後の5グループに編成し、各グループ1名の保育者が引率の上散歩を行った。実施の流れの概要を以下(図1～図8)に示す。



図1 出発前に担当の先生から今日の目的の説明



図2 グループで順番に出発



図3 幼児自身で自分の興味関心があるものを決めて5枚撮る



図4 幼児が撮った写真は、同行している保育者がどこで撮ったかをメモ。幼児自身が保管



図5 帰園後、幼児が撮った写真を個人別に写真保存



図6 その後保育者が幼児の撮ったところにその写真を貼る



図7 グループ毎、ひとりずつ発表



図8 発表後、この地図に説明を書き加えてほしいことを子どもたちに伝える

2. 子どもたちの撮影内容結果

表1 子どもたちの撮影一覧

	第1回 n=25		第2回 n=28	
植物	56	44.8%	65	47.8%
建物	18	14.4%	6	4.4%
発展が期待できるもの	23	18.4%	47	34.6%
そのほか	28	22.4%	18	13.2%
合計	125		136	

表2 「発展が期待できるもの」とした内容の一覧

第1回	第2回
店の屋根の上に飾ってあったサンタ	窓から見えるピカチュウ
街頭に設置されている時計	玄関のリース
家前においてある狸の置物	坂本竜馬の暖簾
理髪店のサインポール(ぐるぐる)	窓の内側にある置物
団地の街灯	小さな祠
道路標識	ガスのメーター
マンホール	坂道(傾斜)
消火栓	家の装飾(足跡)
落ちていた物体	自動販売機とゴミ箱
お店の看板(ビールの形・時計になっている)	玄関の灯籠
家の玄関前の設備品(昇降設備?)	富士山
家前に置いてある物体(何かわからない)	お店(豆腐屋さん、から揚げ屋さん、洋服屋さんなど)
道路標識の柱	2台同じ車の駐車
横断歩道	瓶
車の窓(光るミラー)	花壇の中のうさぎのオブジェ
	こちらから見るとネコに見える椅子

子どもたちが何を撮影したかを4つの項目に分類した。木や花などの「植物」、施設や私宅などの「建物」、子ども自身の興味関心が感じられた「発展が期待できるもの」、そして、写真の内容が不明瞭である、意図がわからない、などの「そのほか」である。結果を表1及び表2に示す。

3. 個人内変化

今回、2回のお散歩を実施した。どちらとも参加した幼児は22名である。個人内で先の4項目（植物・建物・発展が期待できるもの・そのほか、）に変化があったかを示す。

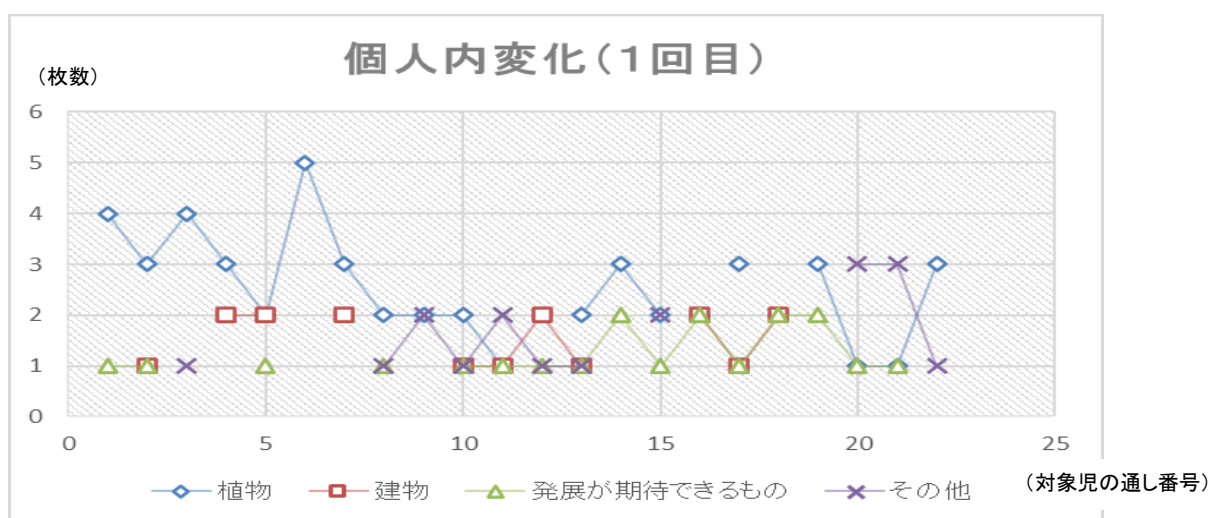


図9 写真撮影内容の詳細(第1回)

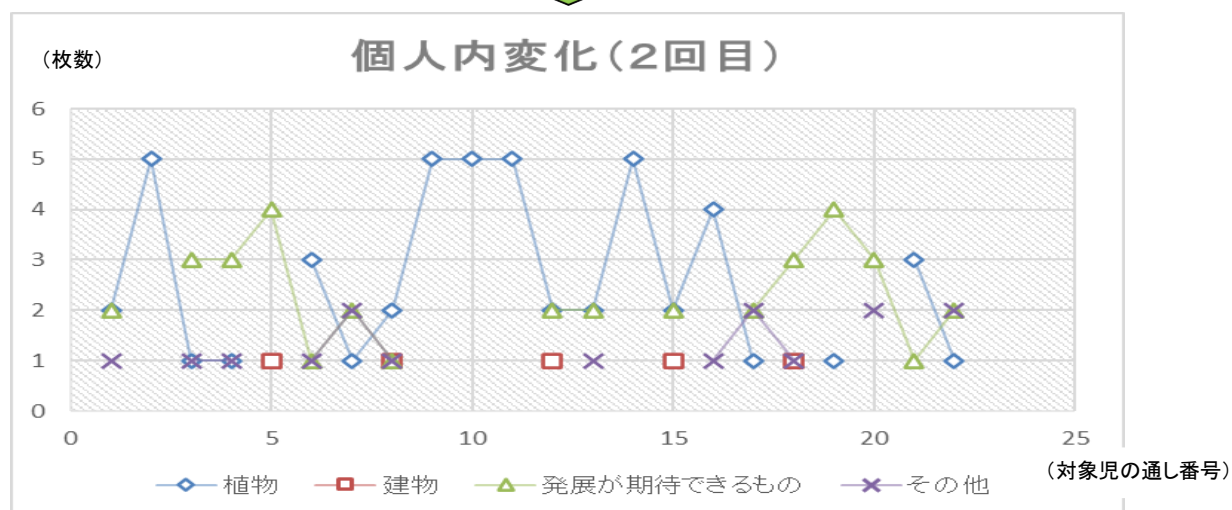


図10 写真撮影内容の詳細(第2回)

(注)

横軸は子どもの通し番号である。今回22名の比較を行った。

縦軸は5枚の写真の内容回数である(対象児によっては5枚以下の場合もある)。

4. 保育者の写真撮影一覧

保育者が実施前に撮影した内容を表3に示す。

表3 保育者の撮影した内容一覧

内容	撮影数	内容	撮影数
玄関・庭の花	8	建設中の建物	1
まっすぐな路(その先は?)	5	店の看板(理髪店・飲食店)	1
花	3	公園の遊具	1
庭先の木(実)	2	壁面の絵	1
マンホール	2	電柱にぶら下がっていた手袋	1
標識(いたわりゾーン)	1	交番	1
標識(歩道)	1	商店街の街並み	1
魚屋さん	1	商店街の看板(〇〇商店会)	1
理髪店のサインポール(ぐるぐる)	1	お店の飾り	1
重機(ユンボ)	1	果物の無人販売	1
庭にたくさんある金魚の水槽	1	合計	26

5. 実施後の様子 (マップの充実)

お散歩後のマップの変化を示す。

1. 第1回後



図11 マップの変化①



図12 マップの変化②

2



図 13 マップの変化③



図 14 マップの変化④



図 15 廊下に貼られたマップを嬉しそうに説明してくれる対象児

【考察】

1. 子どもと地域との関係性

今回のお散歩コースは、園で通常使用しているコースであり、園児にとっては「慣れ親しんだ風景」であった。しかしながら、「興味関心があるもの（不思議なもの・綺麗と思うもの・すごいと思うのなど）」と投げかけても、「何を撮ればいいのか」という戸惑いの姿が非常に見られた。これは、普段行っている「お散歩」が、「行先」が優先で、途中の過程が“楽しむ（見る・聴く・触る・感じる）場や時間”になっていないことを表すと感じる。途中の過程は車などの危険物も多いことから、とにかく「安全に」歩くことが第一義的な目的となっている。保育者は幼児たちが立ち止まった時、その発見に共感する余裕はなく、「きちんと前を向いて」、「きちんと整列して」、「前に遅れないで」歩くことを求める。日常のこのような環境の中では、急に「興味関心があるものを探ること」を求められても探すことは難しい。子どもたちの撮影したもので「植物（木や花）」が多いのは、そのような植物が、「最も身近で目につきやすいモノ」であるからであろう。

しかし、1回目と2回目を比較してみると、少し内容が異なっている。植物の割合は同じくらいだが、「探さなくても見えてくるモノ」から「探さないと見えないモノ（花壇のオブジェやネコの頭に見える椅子、など）」、「考えないと不思議だと思わないモノ（坂道の傾斜、など）」、「日常生活に不可欠だが普段は目にしないもの（ガスのメーター、など）」など、子どもたちの視野は広がっていることを感じる。

子どもたちの個人内でも変化は大きかった。その要因としては、2回を別の場所に行ったことも大きい。また、1回目のルートマップの内容を

覚えている、2回目で要領がわかった、などの経験が“今度はこんなものを撮ってみたい”、“今度はもっとすごいものを見つけたい”などの気持ちに繋がったとも考えられる。対象児の中には、「植物だけを撮る」など、自分の興味関心の限定も見られた。経験は子どもたちを成長させることを感じた。

2. 保育者の意図との相関

今回、保育者には事前に“子どもたちに気づいてほしいモノ・コト”の写真撮影してもらった。内容としては、子どもたちと同様に「植物」関係が多かった。また、理髪店のサインポールやマンホールなど、子どもたちの撮影と同様のモノもある。保育者たちのこのような価値観が子どもに影響している可能性はある。保育者が普段何気なく言語化している内容が、子どもの心に何等かの感情を育んでいるのである。

しかしながら、保育者自身が撮影した内容も、子ども自身の学びにどれだけ繋がっているかを考えさせられる。つまり、保育者自身も、散歩の時には、子どもの安全安心に気を遣うあまり、“地域を感じる”“季節（自然）を感じる”機会にはなっていないのではないか。“ここにこんな自然があったから次の遊びにつなげていこう”などと感じる機会はあるのだろうか。今回の結果から、保育者自身も散歩について改めて考える機会となったようである。

3. 散歩における興味関心の偶発性

散歩でどんなモノに出会うかは、その時の偶発性が寄与する。動物などの生き物、香りが漂う方向、植物がいつ咲くのか…。今回の写真はチェキの台数などの関係で、子どもが直に感じている内容とは少しズレていることも考えられる（撮りたかった内容が撮れなかった）。2回目の散歩の際、何名かの子どもがイチョウの葉を持って帰ってきた。保育者は、散歩の中だけでは表現しきれない感情や感性を帰園後共有する機会が必要であろう。子どもたちの気づきを共有し、次回はそれを確かめる、変化を楽しむなどの過程があって、散歩が楽しい日常として位置づけられるのではないだろうか。散歩を「子ども自身が目的を持って行うもの」、

「子どもたち自身が楽しいから行うもの」となるように考えていく必要がある。

4. お散歩マップの波及効果

今回、いくつかのグループが異なったルートを散策した。お互いの発表をきく中で、お互いに「気がつかなかった」ことの発見があったようである。また、その後、マップに楽しそうに絵を描く姿もあり、地域について教え合う機会となった。そして、ほぼ完成したマップを廊下に貼ることにより、年下の幼児たちが、このマップを大変興味深く観察している姿もあった。

幼児にとって、園の周辺は非常に身近な地域である。現在は送迎も自家用車で行うことが多い中、子どもたち自身が改めて園の周辺を考える機会を持つことは、子どもの成長に大きく影響する可能性が高いことが示されたと言えるだろう。

【参考文献】

- 1) 渡辺京二 「逝きし世の面影」 (2005) 平凡社
- 2) 三輪律江ほか 「まち保育のススメ」 (2017) 萌文社

(2020年12月22日 受理)